

町では、千年以上育まれてきた国見の歴史・伝統・文化をこれから百年後に伝えていくため、これらを生かした「歴史まちづくり」の取り組みを進めています。町や地域が行うこの取り組みについて、毎月お伝えしていきます。

【歴史まちづくり推進室 ☎ 585-2967】
【あつかし歴史館 ☎ 585-4520】



大木戸歴史むらづくりの会×あつかし歴史館 「ひなまつり～桃の節句を祝う～」開催！

2月25日、あつかし歴史館で、地域の歴史や年中行事、行事食を楽しみながら体験し、学ぶことを目的に「ひなまつり～桃の節句を祝う～」を開催し、約200人が来場しました。

会場にはかわいらしいひな壇が飾られ、来場者は国見古典鑑賞会のみなさんの和楽器演奏会、松風会のみなさんによる抹茶体験など、“和”の文化を体験したほか、子どもたちは「折り紙雛人形づくり」「勾玉づくりワークショップ」を楽しみました。



▲華やかな音色が響いた和楽器演奏会



▶ひな壇飾りの前で茶道を体験



▲勾玉づくりに挑戦



▲大木戸地区まるごと博物館特設展示の解説をする福大生



▲ちらし寿司を食べながら交流

また、大木戸歴史むらづくりの会により、子どもたちの健やかな成長を願って「ちらし寿司」「甘酒」などが振る舞われました。来場者からは「和楽器と茶道体験がひな人形の雰囲気合っていてよかった」「ちらし寿司がとてもおいしかった」などの声が聞かれ、少し早い春の訪れを感じながら、桃の節句をお祝いしました。

国見の魅力を伝えたい！～くにみ♡案内人養成講座全3回終了～

昨年12月に開講した「くにみ♡案内人養成講座」が、2月18日をもって全3回の講座を終了しました。この講座は、道の駅の開業により注目を集め来町者が増えている今、国見の歴史、文化、産業、食などの魅力を再発見し、町を訪れる人々におもてなしの心をもって案内できるようにすることを目指し開講しました。

講座では、視察やワークショップを通して、伝えたい町の魅力を発見し、周辺地域とのつながり



▲先進地視察（写真＝宮城県柴田町）で現地ガイドの案内に聞き入る受講者ら

や先進地の取り組みを学び、日頃の活動や仕事で実践する“くにみ流”の案内について考えました。

受講者からは、「町民一人一人が観光大使のつもりで町の良さを伝えたい」「滞在費以上の感動を与えたい」「道の駅との連携と活用を図りたい」などの意見が出されました。講座には、町内外からさまざまな分野で活躍する36人が参加しました。このうち2回以上参加した26人に対し、修了証と町公認のエンブレム&バッジの交付を予定しており、今後、町の魅力の発信者として活躍が期待されます。



▲活発な意見交換がなされたワークショップ



全体合奏「花かげ変奏曲」

練習の成果を披露 若い芽のコンサート



国見古典鑑賞会主催の第13回「若い芽のコンサート」が1月27日、観月台文化センターで行われ、国見町子ども和楽器体験教室生15人が練習の成果を発表しました。

コンサートでは、教室生が指導ボランティアのみなさんとともに箏や三味線による楽曲を演奏し、最後に全体合奏の「花かげ変奏曲」で締めくくるとまで全22曲を披露しました。会場には終始、和楽器の美しい音色が響き渡っていました。

子どもたちの創作意欲を育む

「ショートショート」創作大会

第3回「ショートショート」創作大会が2月4日、観月台文化センターで行われ、国見小学校、伊達東小学校、掛田小学校、二本松北小学校、小国小学校の入賞・佳作者の6年生児童15人が表彰されました。

大会では、事前に行われた一次審査を通過した入賞者10人が創作文を朗読発表し、大賞に佐藤真護さん（国見小）の「名もなき木の独り言」、準賞に中野心裕さん（国見小）の「初めて知った時計台の秘密」と齋藤弘太さん（二本松北小）の「自然と生きる」が選ばれました。



大賞 名もなき木の独り言

国見小6年
佐藤 真護さん

私は、ずっと昔、何百年も前から生きている。同じこの公園で、いつの時代も子供たちを見守って来た。名もなき木だ。私もいつのまにか、年を取りすっかりおじいちゃんの大木になってしまったもんだ。

昔は、よく私の周りを子供たちが走り回っておにごっこをして遊んだり、かくれんぼをしたりしていた。私は、にぎやかな声を聞くのが楽しみで生きがいであった。

学校帰りの子供たちが、私のおしゃべりをしたり、あやとりをしたり、思い思いの時をすごしていた。時には、ケンカをして泣いている子もいたな。私に、寄りそうように、昼寝をする日もあった。一緒に仲間に入ってるような気分で幸せだった。

子供たちだけでなく、野良犬や野良猫、自然の中の虫たちも私の家族みたいなものだ。季節に合わせて、虫たちの鳴き声も変わる。全く、退くつするひまはないのだ。

しかしながら、年々私の近くから子供たちの元気な笑い声、泣き声が聴こえなくなってきた。

「どうしてかなあ。」

「さみしいなあ。」

心の中で、いくら大きな声でさけんでも、もちろんだが返事はないのだ。春が過ぎ、夏が過ぎ、秋が過ぎ、そして、冬が過ぎ、また新しい一年が始まるのだ。

風のうわさで、今の子供たちの間で、テレビゲームと言うものが流行しているらしい。それが、大変おもしろく、何時間もテレビに向かってゲームをしている子供たちが多いらしいのだ。とても残念に感じてしまう。

私は、思った。

「にぎやかな子供たちの声が聴きたいなあ。」

目を閉じると、すぐそこに、子供たちがいるような感覚になっ

「ショートショート」創作文とは？

創作する楽しみや表現力を養うとともに、読書推進の取り組みの一環として、小学校6年の国語の授業で、4枚の写真からテーマを選び、想像をふくらませて物語を創作しました。

たり、つい笑顔になってやけたりしてしまう。

つい最近、うれしい出来事があった。

たくさんの幼稚園生が、遠足に来たのだ。私のまわりでシートをひいて話していた。

「いただきます。」

「お弁当、お外で食べるとおいしいね。」

明るい、元気な、なつかしいような声が聞こえ涙がでた。子供たちは、私を囲み、歌ったり、ダンスをしたりと、にぎやかな時間が過ぎたのだ。

その楽しい時間は、あつという間に過ぎてしまった。本当に、こんな時間が続けばいいなと思うばかりだ。みんなが帰って、また一人ぼっちになってしまった。

それからしばらくは、静かに時間が過ぎていったのだ。数年経ったのだろうか。

「また来たよ。」

「ただいま。」

小さかった子供たちが、大きくなって、立派になり、私に会いに来てくれたのだ。

いつ来ても、安心して来てもらえるように私は、この公園でみんなのことを、のんびり待っているのも、悪くないのかなと、思ってしまう。

私は、何百年も前から生きている。待ちぼうけは、なれっこなのだ。晴れの日には太陽の日差しをたくさん浴びて待ち、雨の日には、たくさんの水分を補給して待つ。

人類みな兄弟とは、よく言ったもんだ。

「これから先、虫たち、鳥たち、人間たち、誰が来ても、仲間だと思って喜んで受け入れよう。」

「ただいま。」

「おかえり。」

と、当たり前のようにしよう。そしてこの先、私の寿命が切れるまで、公園に来る子供たちを、ここでずっと見守り続けていきたいと私は思う。

「ねえ、みんなここで遊ぼう。」

「何して遊ぼうか。おにごっこしよう。」

さっそく、子供たちが来たみたいだ。